

『水神様の愛し子 ～神が人の子を育てたら～』

著：高月まつり

ill：山田シロ

「お前、この本が何を意味するか分かって持ってきたのか？」

そう問われて、雪也は「いいえ」と首を左右に振る。

「お前が読むにはまだ早い」

「え？ 透流様には意味が分かるのですか？ 鮎さんからは、夜中に一人で読めと言われたのですが……」

自分が読むには難しい内容なのだろうか。それともどこかの法典か。

すると透流はゆっくりと立ち上がり、「鮎はいるか！」と声を出して手を叩いた。

しばらくして、「遅くなって申し訳ありません」と、鮎が人の世界の服装のまま透流の部屋に現れた。

「なんだお前、また人の世界に行くのか？」

「はい。向こうに住まう眷属が、何やら人間相手に店を開くそうで、その手伝いに」

鮎は雪也の横に腰を下ろして正座をする。

「そうか。眷属は大事にしろ。………ところでな、鮎。雪也にずいぶんと面白い本を渡したな？」

「あー……。えっと、その、人の世界で十五歳といえば、房事に関心を持つものです。なので、事前に知っておくのもいいかと思ひまして」

鮎が冷や汗を垂らし、ぺこりと頭を垂れた。

「雪也は俺のものなんだが、お前は忘れたのか？ あまり勝手をするな」

「はい。申し訳ありません」

「ところで」

透流がずいと鮎に寄り、「雪也が房事に興味があると思うか？」と真顔で尋ねる。

渦中の人である自分を放って、何の話をしているのか。

雪也は「房事」の意味が分からずに首を傾げた。

「頭では分からなくとも、体が欲望を訴えるでしょう。その時は、雪也の命を拾い上げて育てた透流様がお世話してあげるのがよろしいかと」

「待て。待て待て。俺がか？」

「はい。もし難しいようでしたら、僭越ながら俺が対処しますが」

「つまりそれは、お前が雪也に触れるということか？」

「はい」

自分のことらしいのに、話に加われずに聞いているだけなのが心苦しい。せめて、単語の意味

を教えてくれれば自分も会話できるのに。

雪也はそう思って「あの」と声をかけるが、透流に「待っている」と言われてしまう。

「奉納されて神のものとなった食材は、眷属たちが調理します。雪也はそれを食べて育ったので、体のどこもかしこも清いままです。精を滴らせても問題ないかと」

「そんなことは分かっている。だが、知らずにすむことなら知らないままにさせたい。人の子と同じようなことはさせたくない」

「透流様のお気持ちも分かりますが、万が一のためです」

自分に何か重大なことが起きるのだろうか。

雪也は引きつりそうになる頬を辛うじて堪え、じっと透流を見た。

透流も雪也を見つめ返す。

「……………まあ、そうだな。その時など来ないと思うが、鮎は何もせんでいい」

「はい」

「雪也の命は俺のものだ。だから俺がどうにかする。それでいいな？ 雪也」

話を振られた雪也は、何も分からないまま、囁くように「はい」と返事をする。

いつものことだ。透流のすることはあとから理由が付いてくる。今回もそれだろう。

「俺は透流様のものです」

「よし。この本はお前が読む物ではない。とても難しい、ある意味呪術的なものだ。俺が許すまで保管しておく。それでいいな？」

「はい。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる。

雪也の世界は透流でできているので、彼の言葉に従っていればいい。

それがいつも正しい。

「あの、では透流様、何をしましょうか？ 鮎さんが来てくれたので、また人の世界の話でも聞きましょうか？」

「もう鮎には用はない。雪也、枕になれ。俺は少し横になる。人の願いは今日はもう聞き入れないことにした」

「失礼致します」

鮎は二人を部屋に残して立ち去った。

透流はゆっくり体を動かして、その場にごろりと寝転がる。

せめて布団に入ってくればいいのに、透流は畳の上に寝転がることを厭わない。

雪也は透流の傍らに寄り添い、大人しく透流の手に搦め捕られる。

抱き締めて眠るので「抱き枕」というものらしい。

雪也は透流に抱き締めてもらうのがとても嬉しく、心臓の音が聞こえるのではないかと思うほど激しく高鳴った。

顔まで熱くなってくる。

「お前は気持ちいいな」

「……………ありがとうございます」

透流に奉仕するのが自分の喜びで使命だと思っている。

その気持ちはこれからも変わらない。

ただ。

最近はこうして触れられていると、心の奥がきゅっと痛みを覚えた。時折呼吸も苦しくなる。

自分の体に何が起きているのか分からないのに、それを誰かに伝えることができなかった。

どう説明していいのかわからないのだ。

透流から離れれば苦痛はなくなるのは分かっている。だがそれができない。

それに、離れると寂しかった。

俺の体はどうなっていくんだろう。もしかしたら、このまま死んでしまうのかな。それは嫌だな。ようやくお世話ができるようになったのに。今も、胸がドキドキして、体の中がむずむずする。

透流に優しく頭を撫でてもらおうと、余計に動悸が激しくなった。

そこだけでは足りない、と、まるで透流にあれこれ願う人のように貪欲になる。

そんなものになったらだめだ。透流に嫌われる。お世話をさせてもらえなくなってしまう。

雪也の世界は透流がすべて。

「お前は温かい」

抱き締められたまま、透流の独り言を聞く。

「透流様のお役に立てて、嬉しい……です」

「そうか。こうしていると、初めてお前を添い寝させた時のことを思い出す」

まだ幼かった自分ができた唯一のお世話が「添い寝」だった。

湯浴みを終えたら透流の布団に潜り込むだけの簡単な仕事だったが、「温かい」と微笑んでくれたので嬉しかった。

「俺、これからもずっと、透流様のお傍にいます。俺のことを使ってください」

もう小さな子供ではないので、自分から透流に抱きつくことはないけれど、触れて抱き締めてもらえたらと思う。

「分かってる」

少しぶっきらぼうな声は照れている証拠だ。

雪也は、透流の優しさを感じて、小さく笑いながら目を閉じた。

正月が近づくにつれ、境内が何かと慌ただしい。

巫女装束の女性たちが舞いの練習をし、男たちは正月飾りを並べる台を作っている。

「人間が一番活気づく季節ですね」

「お前も人間ですよ、雪也。ほら、これをあげましょう。奉納された菓子です」

わざわざ丹頂が自分の部屋に寄ったのはこれかと、雪也は彼の手から和紙に包まれた菓子を受け取った。

「ありがとうございます。……ですが俺は……普通の人間とは少し違います」

「それはそうですけどね」

雪也の隣に立ち、外を一瞥した丹頂は、なんとも微妙な表情を浮かべた。

「俺は、自分の寿命が尽きるまで、ずっと透流様の傍でお世話をします」

「そうですね。透流様はあなたの命を拾い上げてくださった」

「……………それが一番なんですけど、でも、今はちょっと……………違う理由もあります」

「おや、なんですか？ それは」

首を傾げる丹頂に、雪也は「俺にもよく分かりません」と言って笑う。

彼は「分からなくはないけれど」と言いながら、透流の正月の予定を確認すべく他の眷属たちを呼んで部屋を移動した。

人間と眷属は体のつくりが違うのだと、頭では分かっていた。

眷属たちは、その大部分が透流のために奉納された生き物で彼の手で眷属にされた。

丹頂は、御神体である透流川に毎年飛来し、生涯を終えたあとに透流の元へはせ参じたという。

雪也が知らないだけで、翼を持つ眷属も大勢いるそうだ。

魚の眷属も、鮎だけでなく大勢いる。大概、みな雪也と仲がいい。もっと大きな生き物も社に住まっているらしいが、十五年生きてきて、雪也はまだ出会っていない。ウサギや狐などの小動物は、いつもまとわりついてくるが。

彼らは「雪也には毛皮がないのね」「つるつるで寒くないの？」と無邪気に話しかけてくる。「透流様と同じだよ」と言うと、彼らは「形が似ているだけ」「透流様と同じだなんて、そんな大それたこと」と言った。

そうだろう。神様と人間を同等に考えてはいけないのだ。

透流は人の姿をしているが、あきらかに神で、雪也はその事実に最近戸惑っている。

ずっと傍にいたいのに、いざ傍にいと顔が赤くなって離れたくてたまらない。他の眷属に話しかけている姿を見ると、自分とだけ話してほしいと思ってしまう。こんな気持ちは生まれて初めてだ。

鮎がくれた本の中には、こういう時の対処は何も書かれていなかった。

「困ったな」

自分は人間だから、こんな困ったことになってしまうのか。人でない眷属であれば、なんともならないのか。

丹頂に聞こうと思ったが聞けなかった。聞いたら怒られそうな気がした。

頼みの鮎は、先週から人の世界に行ったまま帰ってこない。きっと去年と同じように、正月あたりに土産持参で帰ってくるのだろう。

そうなると、雪也はあと一週間ほどこの悩みを抱えて過ごすことになる。

「どうしよう」

昨日は帯の結び方を間違えそうになった。透流が「おや？」と呟いたので、すぐに直して事なきを得た。今日の朝など着物の柄を間違えた。正月用の、松の刺繍の着物を取り出してしまったのだ。これには雪也も顔を青くした。

が、青い顔のまま「こちらでした」と、隣の桐筆筒に入っていた雷鳥が描かれた着物を引っ張り出した。

透流は「具合でも悪いのか？ 人は病を患うとすぐに死ぬ」と逆に氣遣われてしまった。

頼りないと思われたくないのに、着付けのあとは暇を出されて、今もこうして外を覗いて退屈を紛らわしている。

今までこんな失敗をしたことなどなかったのに。

「俺……やっぱり病気のかな……」

そういえば最近、朝の寝覚めも今一つよろしくない。

妙な高揚感で目が覚めて、気がつく时下着を汚していることもある。この年で粗相をするなんて、雪也は衝撃を受けるより先に情けなくなった。

幸い布団までを汚す粗相ではなかったのだから、下着はこっそり洗って自分で干した。ただの粗相のはずなのに、なかなか汚れが落ちないのも困る。

神の住まう社の中で病気になったとあっては、透流の威厳にも傷が付きかねない。

雪也は、もしかしたら自分は社から出なければならぬかもしれないと思って泣きたくなった。

透流から離れて生きていける気がしない。

「雪也はいるか」

返事をする前に、透流が障子を開けて入ってきた。

「は、はい……」

「もう元気になったか？」

そう言いながら、透流が雪也に小さな枝を見せる。枝の先にはいくつか小さな蕾が付いている。寒さから自分を守ろうとしている堅い蕾だ。

「これは、梅、ですか？」

「ああ。烏が間違えて折ってしまったと、しょんぼりしていたのでもらい受けた。社の中なら、無事花を咲かせるだろう」

「そうですね。透流様の神力がありますから」

「お前の部屋に飾ればいい」

雪也の部屋には、鮎が持ってきてくれた本ばかりで、雅なところは一つもない。透流はそれを気にしているのか、いや、神はそんなことは気にしないだろう。

今は雪也の髪を弄んで、耳に梅の小枝を挟んでいる。

「こここのところ調子が悪いだらう。お前は社に暮らしてはいても人の子だ。具合が悪ければすぐに俺を呼べ」

「俺は……その、大丈夫です。透流様のお世話をするのが俺の役目です。俺は元気です。丈夫にできているし、背の丈もきつとすぐに透流様を追いこします」

雪也は耳にかけられたままの梅の枝を右手で持ち、笑顔を見せた。

内心は心臓がドキドキと激しく鼓動して、透流を見ているだけでいても立ってもいられないほどだったが、必死に抑える。

「お前は俺のものなんだから、勝手に患ったりするな。いいな？」

「はい」

頬を指ですりすりと優しく撫でられて、死ぬかと思った。

彼がこんな風に雪也に触れるのはいつものことなのに、死ぬほど嬉しかった。そして、なにやら下半身がおかしなことになっていく。

腰がジンジンと痺れて、股間に熱が集まる。

「雪也、顔が赤い。少し熱があるな。誰か呼ぼう」

「大丈夫です。俺、病気じゃない……」

「だがな、雪也」

「俺……っ、……社から出されるの、いやです。だから、病気なんかじゃない」

「何を言ってる。病なら俺が簡単に癒せる。だから、ほら……、ん？」

透流の視線が、雪也の顔から下に移っていくのが分かった。

いきなり沈黙したので、不安になる。自分はどれだけ大変な病気なのだろう。

「ああ、なるほど……。すっかり忘れていたが、雪也もそういう年になったのか。人の子はいろいろと面倒だな」

「め、面倒かけて……ごめんなさい、俺……」

「まあ、お前は人の子だから、育てて行けばこういうこともあるだろう」

透流がその場に跪き、雪也の着物の裾を左右に開いた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>